

道徳性の芽生えを培う上で親は何に配慮すべきか？ —高校生及び大学生と子育て経験者の記述の差異—

越中康治

宮城教育大学 教育学部 学校教育講座

本研究の目的は、道徳性の芽生えを培う上で親や保育者が何に配慮すべきかについて、高校生及び大学生と子育て経験者の記述の差異を比較検討することであった。自由記述文を形態素解析にかけて頻出語を抽出した上で、高校生及び大学生と子育て経験者のそれぞれでいずれの語が言及されやすかったかを確認するために対応分析を行った。語の布置状況を踏まえてテキストデータと照合したところ、高校生では「絵本をたくさん読み聞かせてあげる」「一緒にたくさん遊んであげる」などの情緒的なかわりが、大学生では「悪い行動を叱る」「ルールを教える」などの指導的なかわりが多く記述されていることが特徴的であった。他方、子育て経験者では、「言葉」（言葉をかける、言葉で伝える、言葉に表す）や「気持ち」（気持ちを伝える、気持ちを持たせる）を中心とした親子間の相互作用に言及した記述が多いことが特徴的であった。

キーワード：道徳指導観、子育て経験、権威主義的伝統主義、高校生、大学生

1. 問題と目的

幼児期に道徳性や規範意識の芽生えを培う上で、親や保育者が果たす役割が重要であることは言うまでもないが、両者に期待される役割に相違はあるのであろうか。越中・目久田・中村・小津・前田[1]は、教育学部生が親と保育者に対して期待する役割の相違について、質問紙調査から検討を行っている。具体的には、幼児期に道徳性の芽生えを培う上で保育者（幼稚園教諭や保育士）と親（保護者）が配慮すべきことを箇条書きするよう求めた上で、その自由記述データをテキストマイニングの手法を用いて分析している。保育者と親の自由記述それぞれについて形態素解析を行い、頻出語を抽出し、それらの語同士の関連を解析するために階層的クラスター分析を行っている。

階層的クラスター分析の結果とテキストデータを照合したところ、教育学部生が親と保育者に期待する役割は、「1. 良いことをしたらほめる」「2. 悪いことをしたら叱る」「3. 他者の気持ちを考えさせる」「4. 子どもの話を聞く」「5. 大人が手本・模範となるよう行動する」「6. 自分でやることができるようにする」「7. あいさ

つを大切にする」など、ほとんど共通するものであることが確認された。しかし、親とは違う保育者の役割として、園生活の中で社会や集団（生活）における「8. ルールを教えること」が挙げられていた。

さらに、越中・目久田・中村・小津・前田[2]は、保育者養成系学科に所属する短期大学生を対象として同じ手続きで質問紙調査を行い、自由記述データを収集した上で、テキストマイニングの手法を用いて同様の分析を行っている。その結果、保育学生が親に期待する役割もまた、「1. 話を聞く」「2. ほめる、叱るなどして良い・悪いを教える」「3. 自分でやることのできるよう、あいさつをすることができるようにする」「4. 子どもの見本・手本になる、なるべく一緒にいる」「5. 人の気持ちを大切に、言葉で伝える」など、教育学部生とほぼ同様のものであった。

他方、保育者に期待する役割に関しては、「1. 子どもが考えることができる時間・機会・場をつくる」「2. けんかの際に、子どもの気持ちをしっかり聞き、自分の気持ちと相手の気持ちを伝えあうことができるようにする」「3. 良いことはほめて、悪いことは悪いと伝える」「4. 友だちを大切に・仲良くすることができるように

する」「5. 人や言葉を大切にすることを教える、見本となる」など、親に関する記述と内容が異なっていた。

越中他[2]では、越中他[1]の結果を踏まえた上で、保育学生は教育学部生に比して親と保育者の役割を区別する傾向にあると考察している。親の役割に関しては、保育学生においても教育学部生と同様に、「悪いことを叱る」「あいさつができるようにする」などの直接的な指導と関連する記述が多くなされていた。しかし、保育学生においては、これらの直接的な指導に関する内容は保育者の役割としては多く記述されなかった。また、教育学部生が「ルールを教える」ことを保育者の役割として多く挙げたのに対して、保育学生はむしろ「子どもが考える時間・機会・場をつくる」ことを重視していた。保育学生と教育学部生との間には、保育者の役割に関して認識・態度の相違があることが示唆された。

他方、親の役割については、保育学生においても教育学部生においてもほぼ同様の記述がなされていた。こうした親の役割について、子育て未経験の学生と子育て経験者との間には、どのような認識の差異があるのであろうか。本研究では、この点について自由記述の分析から探索的に検討を行う。小学校低学年児童の保護者と大学生及び高校生の記述を比較するとともに、道徳発達や道徳指導に関する認識との関連が指摘されるパーソナリティ(権威主義的伝統主義)[3、4]の差異によって記述内容に違いが生じるか否かも検討する。

2. 方法

2.1 対象者

質問紙調査を実施し、回答に不備のなかった高校1、2年生 87名(男性 2名、女性 85名)、大学生 1年生(教育学部) 74名(男性 19名、女性 55名)、小学校低学年児童の保護者 78名(男性 8名、女性 68名、不明 2名)を分析の対象とした。

2.2 質問紙

幼児期に道徳性の芽生えを培う上で親(保護者)が配慮すべきことについて自由記述を求めた。具体的には“「道徳性の芽生え」を培うために、家庭において親(保護者)はどのような指導や配慮をする必要があると思いますか。箇条書きで 5個、以下の空欄に記入してください”と教示した。

あわせて、敷島他[5]の権威主義的伝統主義尺度 5項目(「伝統習慣にしたがったやり方をとるべきだ」「先祖代々と同じやり方をとるべきだ」「よい指導者は下のものに対して厳格であるべきだ」「権威ある人には常に敬意をはらうべきだ」「子どもは両親に対して絶対服従すべきである」)を用いた。教示は“以下の各項目の内容は、あなたの考えにどの程度あてはまりますか。「とてもよくあてはまる」(6)～「まったくあてはまらない」(1)の中から 1つを選んで○をつけてください”とし、6件法(とてもよくあてはまる:6点、あてはまる:5点、ややあてはまる:4点、あまりあてはまらない:3点、あてはまらない:2点、まったくあてはまらない:1点)により回答を求めた。

3. 結果

3.1 群わけ

権威主義的伝統主義尺度 5項目の合計得点の平均は、高校生が 17.0($SD = 2.7$, range = 10-22)、大学生が 13.8($SD = 3.2$, range = 5-21)、親が 16.1($SD = 3.4$, range = 9-24)であった。なお、3群間に差があるかを検討するため 1要因分散分析を行ったところ、群の主効果が有意であった($F(3,209) = 136.90$, $p < .01$)。TukeyのHSD法(5%水準)による多重比較の結果、大学生 < 親・高校生が有意であった。5項目の合計得点をもとに、高校生(H)、大学生(U)、親(P)のそれぞれを、権威主義的伝統主義高群(H)、中群(M)、低群(L)の3群に分割した(各群の平均 $\pm 0.5SD$ を基準とした)。

3.2 テキストマイニング

松村・三浦[6]を参考に TinyTextMiner(0.70 for Win)と R(2.13.0)を用いた分析を行った。自由記述文を形態素解析にかけて名詞、形容詞、動詞及び副詞を抽出し、出現頻度上位 30 語を分析対象とした。各群における頻出語の出現頻度を Table 1 に示す。また、各群でいずれの語が言及されやすかったかを確認するために Table 1 について対応分析を行った結果の散布図を Figure 1 に示す。なお、対応分析の結果に関して、2 つの軸の累積寄与率は 71.8% (第 1 軸 49.4%、第 2 軸 22.4%)であった。

石田[7]によれば、対応分析では原点付近に特徴的でない一般的な語がプロットされる。Table 1 及び Figure 1 から、「子ども」「教える」「良い」「ほめる」「あいさつ」などの語はいずれの群においても頻出しているといえる。具体的な記述を抜粋すると、「最低限の常識は、家できっちり教える(PH)」「他人を助けたらほめる(PL)」「よいことをしたら褒め、悪いことをしたら叱る(PM)」「あいさつをきちんと教える(UM)」「家族などに自分からあいさつできるようにする(UM)」「正しいこと、悪いことをきちんと教える(HL)」などの表現はいずれの群においても共通して認められた。

Table 1 高校生・大学生・親の権威主義的伝統主義高群・中群・低群における頻出語の出現頻度

	高校生			大学生			親		
	高群 HH (n=22)	中群 HM (n=45)	低群 HL (n=20)	高群 UH (n=24)	中群 UM (n=29)	低群 UL (n=21)	高群 PH (n=28)	中群 PM (n=21)	低群 PL (n=29)
する	46	74	37	43	54	35	45	52	41
子ども	18	26	18	16	20	14	10	19	20
教える	11	24	7	10	14	14	10	6	16
良い	9	16	7	6	15	9	11	10	9
悪い	7	13	6	5	13	15	11	7	7
ほめる	7	11	4	4	13	7	8	7	8
叱る	7	8	5	7	11	7	4	7	1
あいさつ	5	4	2	7	8	5	5	10	9
聞く	6	14	3	3	2	2	5	6	6
やる	5	13	5	2	3	3	4	4	4
自分	1	7	5	3	4	3	4	7	7
人	3	3	1	1	8	2	8	8	5
読む	8	12	4	4	3	2	0	3	0
なる	2	4	4	2	6	1	4	8	5
考える	2	5	5	3	8	1	3	2	6
一緒	4	6	8	2	2	3	1	2	7
遊ぶ	7	12	5	3	2	3	1	1	1
行動	2	2	0	6	9	2	3	3	5
気持ち	4	4	0	1	0	0	9	4	10
大切	5	4	3	1	4	2	6	2	3
持つ	2	3	2	1	4	1	9	2	5
たくさん	3	7	3	1	3	6	1	1	3
話	2	3	3	5	1	3	1	3	3
ある	2	3	0	3	2	0	3	6	4
絵本	5	10	1	2	2	1	0	2	0
言葉	0	2	0	2	0	0	3	5	7
できる	1	5	1	2	4	0	2	1	3
守る	2	1	0	2	1	2	3	2	6
ルール	1	3	1	3	3	4	0	2	2
思う	1	2	0	1	1	1	4	5	4

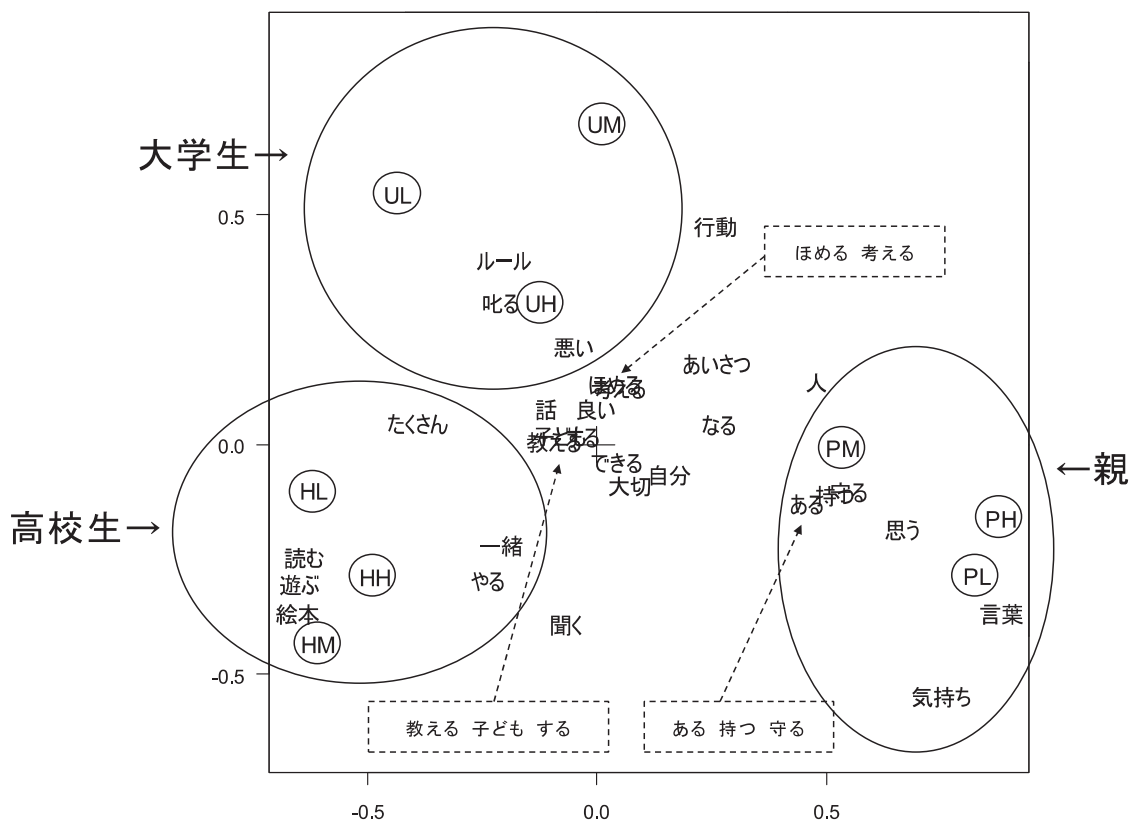


Figure 1 対応分析の結果の散布図

次に、Figure 1 に関しては、第1軸が親と学生(正が親、負が学生)を弁別する次元と解釈できそうである。また、第2軸は、強いて言うならば、大学生とその他(正が大学生、負がその他)を弁別する次元と解釈できそうである。高校生は高校生、大学生は大学生、親は親でまとめてプロットされており、パーソナリティ(権威主義的伝統主義)による差異はほとんどないものと解釈できそうである。

語の布置状況を踏まえてテキストデータと照合すると、高校生(HH, HM, HL)においては、「絵本」「読む」「遊ぶ」「一緒に」などの語が相対的に多く使用されているように見て取れる。具体的な記述を抜粋すると、「絵本を読んであげる(HH)」「絵本の読み聞かせ(HM)」「一緒に遊ぶ(HM)」「親と子どもと一緒に遊ぶ(HL)」「子どもと同じ目線になり遊ぶ(HM)」「家の外の友達と遊ばせる(HL)」などがあつた。

また、大学生(UH, UM, UL)においては、「叱る」「ルール」の語が相対的に多く使用されているように見て取れる。具体的な記述を抜粋すると、「叱るべき時は叱る(UH)」「悪いことはきちんと叱る(UL)」「家庭内でのルールを教える(UM)」「ルールに従うことの重要性を話す(UH)」「基本的ルールを教える(UH)」などがあつた。

さらに、子育て経験者(PH, PM, PL)においては、「言葉」「気持ち」「守る」などの語が相対的に多く使用されているように見て取れる。具体的な記述を抜粋すると、「人として守るべきことを教える(PH)」「親がマナーを守る(PL)」「感謝の気持ちを言葉で表す(PL)」「何事にも感謝の気持ちを持たせる(PH)」「感謝の気持ちを伝える(PM)」「ありがとう、うれしいなどの気持ちが伝わる言葉をたくさんかける(PL)」「私たちからの言葉かけ見守り(PL)」などがあつた。

結果を総括すると、本研究ではパーソナリティ(権威主義的伝統主義)による差異はほとんど認められず、基本的に子育て経験者か否かで記述に違いが見られたといえよう。他方、高校生と大学生との間にも違いが見られたが、これは大学生の群が他の群とは異なる特徴(男性が多く、権威主義的伝統主義得点が低い)を持っていたことと関連しているのかも知れない。この点については、十分な量のデータを収集した上で、再度検証する必要がある。

4. 考察

本研究の目的は、道徳性の芽生えを培う上で親や保育者が何に配慮すべきかについて、高校生及び大学生と子育て経験者の記述の差異を比較検討することであった。自由記述文を形態素解析にかけて頻出語を抽出した上で、高校生及び大学生と子育て経験者のそれぞれでいずれの語が言及されやすかったかを確認するために対応分析を行った。語の布置状況を踏まえてテキストデータと照合したところ、まず、「良い・悪いを教える・考えさせる」「自分でできるように」「ほめる」などの表現が高校生・大学生・親のいずれにおいても多く用いられる一般的な表現であることが確認された。

また、高校生では「絵本をたくさん読み聞かせてあげる」「一緒にたくさん遊んであげる」などの情緒的なかわりが、大学生では「悪い行動を叱る」「ルールを教える」などの指導的なかわりが多く記述されていることが特徴的であった。他方、子育て経験者では、「言葉」(言葉をかける、言葉で伝える、言葉に表す)や「気持ち」(気持ちを伝える、気持ちを持たせる)を中心とした親子間の相互作用に言及した記述が多いことが特徴的であったといえるかも知れない。もちろん、ひとくちに高校生、大学生、親といっても、一人ひとりの記述は様々である。しかし、高校生、大学生、親のいずれにおいても多く用いられる一般的な表現

がある一方で、それぞれに特徴的な表現もあることが示唆された。

最後に、本研究では、親の役割に関する一般論を尋ねたためか、記述内容は主に子育て経験の有無に左右され、パーソナリティと道徳指導観との関連は十分に検討できなかった。また、そもそも本研究は、データの量からして一般化には自ずと限界がある。これらの課題を踏まえて、十分なデータを収集した上でより詳細な検討を行うことが今後の課題である。

5. 付記

本研究は日本パーソナリティ心理学会第21回大会において発表した内容を加筆・修正したものである。本研究はJSPS 科研費(22730510、15K17263)の助成を受けた。

6. 引用文献

- [1] 越中康治, 目久田純一, 中村多見, 小津草太郎, 前田健一: 道徳性の芽生えを培う上で親と保育者は何に配慮すべきか?—テキストマイニングによる教育学部生の認識の検討—, 日本発達心理学会第22回大会論文集, p. 153. (2011).
- [2] 越中康治, 目久田純一, 中村多見, 小津草太郎, 前田健一: 道徳性の芽生えを培う上で親と保育者は何に配慮すべきか? (2)—テキストマイニングを用いた保育者養成系学科に所属する短期大学生の認識の検討—, 日本教育心理学会第53回総会発表論文集, p. 331. (2011).
- [3] 越中康治: 教育学部生の道徳教育観と権威主義的伝統主義との関連, 宮城教育大学紀要, vol. 47, pp. 307-313. (2012).
- [4] 越中康治: 小学校教諭における道徳教育のイメージと権威主義的伝統主義との関連—教職に就く前と現在のイメージの相違に焦点を当てて—, 宮城教育大学紀要, vol. 48, pp. 221-228. (2013).

- [5] 敷島千鶴, 安藤寿康, 山形伸二, 尾崎幸謙, 高橋雄介, 野中浩一: 権威主義的伝統主義の家族内伝達—遺伝か文化伝達か—, 理論と方法, vol. 23 (2), pp. 105-126 (2008).
- [6] 松村真宏, 三浦麻子: 人文・社会科学のためのテキストマイニング 誠信書房 (2009).
- [7] 石田基広: Rによるテキストマイニング入門 森北出版 (2008).